



シーボルト『NIPPON』の捕鯨図

宮崎克則

The Whale Fishery Picture of Siebold 'NIPPON'

Katsunori MIYAZAKI

九州大学総合研究博物館：〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan

はじめに

1830年1月1日(文政12年12月7日)、国外追放となった33歳のシーボルトは日本妻「たき」と娘「いね」に別れを告げ、バタビアへ向かう。7月にオランダへ帰り着いた彼は、収集した博物資料を整理しつつ、32年から『NIPPON』、33年から『日本動物誌』、35年から『日本植物誌』を刊行し始める。20年以上の長期にわたって分冊で出された3部作は、どれも自費出版であった(1)。

『NIPPON』は結果的に本文1~7章、図版367枚となる。ドイツ語で出された『NIPPON』の印刷はライデン(オランダ)のJ・G・ラウが担当した。本文編内表紙の最下段に彼の名前がある。ドイツ語版からオランダ語版(第1分冊のみ)が出され、次いで部分訳のフランス語版・ロシア語版も出る。ドイツ語版のタイトルは、「NIPPON」が主題で、副題として「日本およびその近隣諸国と保護国、すなわち南千島列島を含む蝦夷・樺太・朝鮮・琉球諸島に関する記録集」とある。日本を主体に周辺地域の歴史・風俗・社会を紹介した『NIPPON』は、それまでにヨーロッパで出ていた日本関係の研究書に比べると、圧倒的に図版が多く、これを購入した人々はいまだ未知の国であった日本を容易にイメージすることができた。

図版は川原^{けい}慶賀の絵をもとにしたり、他の資料に基づきオランダの画家たちによって石版に描かれ印刷された。石版による印刷は1798年に完成した技術であり、銅版のように原版に凹凸をつけることなく、クレヨンなどで描けば化学反応で原版を作ることができた。高純度の石灰石に脂肪性のクレヨンやインクなどで絵を描き、次に弱酸性溶液(アラビアゴムと硝酸の混合液)を塗る。化学反応によって描かれた部分は油性物質を強く引きつける力を持ち、描かれていない部分は水分を保持するようになる。こうして石版上に水分を弾く部分と保持する部分ができる。石版を水で湿らせたのち、印刷用の油性インクを乗せると、絵を描いた部分にのみインクは付着し、その他の部分ではインクが弾かれる。そして紙を当て刷り機にかけるのである(2)。

『NIPPON』図版のうちの1枚が捕鯨図である。タイトルはオランダ語で「WALVISCHVANGST」(捕鯨)、ドイツ語で「WALLFISCHFANG」(捕鯨)とあり、左上に「NIPPON VI」、右上に「TAB. III」とあり、『NIPPON』第6章3番目の図であることを示している。また左下に「A van der Gant Impr」、右下に「Juxt pict jap van

Straaten in lap del」と石版画家名等が極めて細かな文字で印刷されている。意味は「日本の絵にならってファン・ストラテンが石版に描き、ファン・デル・ハントが印刷した」という内容である。今のところ印刷工・画工については不明である。シーボルトは何をもとに捕鯨図を描かせたのか、彼は日本捕鯨をどのようにとらえていたのかを検討しよう。

【註】

- (1) 宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の配本」(九州大学総合研究博物館研究報告)3号、2005年)。
- (2) 町田市立国際版画美術館編『版画の技法と表現』(町田市立国際版画美術館発行、2003年、改訂第2版)。

1.シーボルト以前の捕鯨研究

現在の日本捕鯨は、国際捕鯨委員会(IWC)が1982年に商業捕鯨の全面禁止を決定した結果、政府による規制・管理のもとで規制対象外の小型鯨類の捕獲が実施されている状況にある。しかしかつて、和歌山県・高知県・九州北部等の諸県域では、捕鯨業が地域の基幹産業として展開し、明治期以降も欧米の捕鯨技術を取り入れながら存続してきた。

夏から秋、鯨はオホーツク海以北の海に棲息し、冬には日本海・太平洋の回遊路を通してフィリピン海域に南下して子育てをする。そして春になると、逆コースをたどって北上する。日本列島の海域は鯨の通り道であり、縄文・弥生時代の遺跡からも鯨の骨が発見されているが、集団で組織的に捕鯨するのは戦国時代末から江戸時代初めに三河から紀州地域で始まった。鯨を追いかけ銚^{もり}で突いて捕る「突取法」による捕鯨はすぐに九州北部へも伝わり、捕鯨集団の「鯨組^{くじらぐみ}」が組織された。鯨組は大きな利益をもたらしたから、藩権力^{うんじょう}はこれを保護し、操業許可と引き換えに運上銀を納めさせた(1)。そうした日本の捕鯨に興味をもつ者が^{うんじょう}出島にやってきた人々のなかにいた。彼らは自由に捕鯨地を見聞することはできなかったが、北海やグリーンランド海域での捕鯨と比較しながら、日本捕鯨について調査し、その成果をヨーロッパで出版した。

【図1】 17・18世紀 北欧捕鯨船団図



「瀕死の鯨に接近」／銅板手彩色／宮崎克則蔵

ドイツ人のケンペルは1690年(元禄3)に出島商館の医師として来日、91年と92年に商館長の江戸参府に随行し、日本の歴史・社会・政治・宗教・動植物などを総合的に観察した。得意な絵筆をとって挿絵も準備した。帰国後は故郷レムゴーの領主の侍医となり、1712年に『廻国奇観』を出版し、死後の1727年に英語版『日本誌』が出た。『日本誌』は各国語に翻訳され、ヨーロッパにおける日本研究の基本書となる。

『日本誌』の11章が「魚介類」であり、フグやタイ・イワシなどをオランダ人は何と呼んでいるのか、日本ではどのように食しているかを記す。この章の最初が鯨であり、その種類や利用方法の他に、捕獲方法を簡潔に記す(2)。

海棲動物全体の中で、鯨ほど庶民の空腹を満たしてくれる食料はない。鯨はほとんど全日本周辺で捕獲される。しかし一番多く捕れるのは、日本本島の南海岸を洗っている熊野灘である。これに次いで対馬と五島付近でよく捕れ、大村湾や野母崎沖合でも捕れる。捕鯨にはグリーンランドと同じように銚子を使用し、捕鯨に都合よく出来ている特殊の船を用いる。捕鯨用の船は、小型で幅が狭く、舳が尖っており、10人乗りの快速船である。大村の義太夫(Gijlajio)という金持ちの網元が、1680年に新しい捕鯨法を発明した。それは指二本位の太さの網の網で鯨を引く方法であり、その後与右衛門(Jwonomo)という名の五島の農夫が、幸いにもこの捕鯨法を承継した。鯨は、網に引っかかると感ずると泳げなくなり、静止する。そこへ通常の方法で銚子を打ち込むのである。この方法は、普通の方法よりも仕掛けが大がかりだし、費用もずっと嵩む。普通なら銀20箱以上はかからないが、この方法だと経費はどうしても20箱以下ではすまない。しかしそのかわり、収穫は大きく、その点は有利である。

ケンペルは、網を利用して鯨の動きを鈍らせ銚子で突く「あみかけつきとり網掛突取法」が「1680年」(延宝8)に「大村の義太夫」によって考案されという。「網掛突取法」をいつ誰が始めたのかについて、一般的には大村藩が編纂した『見聞集』『郷村記』の記事から、延宝5年(1677)に紀州の熊野太地浦で太地角右衛門が創始した「網掛突取法」を、貞享元年(1684)に肥前大村の鯨組主である深沢儀太夫が太地で見聞し、いさき壱岐勝本浦に導入したといわれるが、延宝8年に深沢儀太夫が壱岐瀬戸浦で創設したとする説もあり(3)、ケンペル説と符合している。ケンペルが何の史料にもとづいて記しているのか不明であるが、彼の来日10年ほど前のことであり、同時代の記録として貴重である。彼が小使として雇い史料収集と調査・研究の助手とした今村源右衛門の調査によるのだろうか(4)。

その後、18世紀後半に3回にわたって出島の商館長を勤めたティツィングは、福知山藩主くつきまさつな朽木昌綱・鹿児島藩主しまづしげひで島津重豪らの大名、蘭学者の桂川甫周・中川淳庵らと交

流し、「捕鯨絵巻」を集めている。死後の1822年に刊行された『日本風俗図誌』14章に彼が収集した資料目録があり、そこに(5)、

一 日本の漁師

9隻の舟で捕鯨に従事しており、捕鯨のために非常に大きな網を投げている。薄い紙の巻物で、長さ4フィート4インチ、幅10インチである。

一 網を破った鯨

鯨は四隻の舟の甲板にいる多勢の漁師の銚子から逃れようとしてもがいている。前に挙げたものと同じ紙の巻物で、長さ2.5フィート、幅10インチ。

とある。約1.3メートル(4フィート4インチ)と76センチ(2.5フィート)の絵がどのようなものであったか、確認はできないが、場面で裁断された捕鯨絵巻を収集していたようである。続けてシャルルボアの解説が付されており、内容はケンペル『日本誌』からの転載である。ティツィング『日本風俗図誌』は、婚礼・葬式などの風俗習慣や日本史の他に田沼政権の対外政策、浅間山噴火などについて記しているが、捕鯨についての記述はない。ティツィングの収集資料は彼の死後に競売され、一部はパリ国立図書館にある(6)。しかし、その中に捕鯨絵巻などは見あたらなかった。散逸してしまったようである(2008年9月の調査)。

ケンペルを強く意識し、彼の研究を超えることを目指していたシーボルトは、日本捕鯨についてどのような情報をいかに収集したのだろうか。

【註】

- (1) 中園成生「くじら取りの系譜」(長崎新聞社、2001年)。
中園成生・安永浩「鯨取り物語」(弦書房、2009年)。
- (2) 『日本誌』上巻、252頁(今井正訳、麗々閣出版、1973年)。
- (3) 中園成生「西海漁場における網掛突取捕鯨法の開始」(『島の館だより』11号、平戸市生月町博物館、2007年)。
- (4) 片桐一男「ケンペルと今村源右衛門英生」(ヨセフクライナー編『ケンペルのみた日本』、NHKブックス、1996年)。
- (5) 沼田次郎訳「ティツィング日本風俗図誌」(新興国叢書、雄松堂、1970年)。
- (6) 小杉恵子「パリ国立図書館における18～19世紀収集和古書目録稿」(『日蘭学会会誌』17-1号、1992年)

2.『NIPPON』のなかの産業

分冊で刊行された『NIPPON』の章立ては以下の通りである。

- 第1章 日本の数理地理と自然地理、海上旅行
- 第2章 民族と国家、陸・海の旅
- 第3章 神話と歴史
- 第4章 技術と学問
- 第5章 日本の神々
- 第6章 農業・工業・工芸および貿易
- 第7章 日本の近隣諸国と保護国

産業・貿易に関する6章の内訳は、

- 第1節 対外貿易の制限と対ヨーロッパ通商関係途絶の結果の国内産業の発展
- 第2節 日本におけるオランダ貿易の始まりから現在まで
- 第3節 オランダ人の航海と貿易、対外貿易の手配、特にオランダ商人の貿易事務所輸入品と輸出品、日本におけるオランダ貿易の現状と将来の展望に関する評価
- 第4節 日本と中国の貿易
- 第5節 日本とその保護国・近隣諸国・高麗、琉球、蝦夷、南千島列島、樺太の貿易
- 第6節 国家の物質的救済手段、生産的・工業的・商業的階級、国内産業

である。1節から6節の前半までは12回配本で配られ、6節後半が13回配本で追加された。1832年の第1回配本から1851年第13回配本の内容を把握できるのは、初版の九大本『NIPPON』（九州大学附属図書館医学分館蔵）に残る「INHALT」による。『NIPPON』に目次はなく、どの章節がいつ配本されたか不明であるが、九大本には配本時に添えられた配本内容をしめす「INHALT」がすべて残っており、どの章節・図版がいつ配られたかを復元できる(1)。

13回配本の時期は、「INHALT」に1851年付のシーボルト報告があることから判明するが、12回配本の時期は不明である。ただし、日本とオランダの貿易について書いた本文中に「現在、1844年」とあり、配本は40年代後半と考えられる。『NIPPON』は1832年から刊行されたので、6

章は後期の作となる。

シーボルトの日本派遣は、日本—オランダ貿易を再検討するための博物調査にあったから、貿易についての記事が多いのは当然であろう。6章1節は、鎖国により外国から得ていた品物の輸入が少なくなったため、絹・木綿・砂糖・染料・薬種などの生産が次第にさかんになり、また商業も発達したことを概観する。2節では、1609年(慶長14)にオランダ人が徳川家康から朱印状を得て以降の貿易史について、ケンペルらの先行研究や「シーボルト事件」の処理に苦慮した商館長メイランの『日欧貿易史概観』(2)に基づきながら概観し、日本人にオランダ人が友人として欠くべからざることを確信させてこそ、日本政府は貿易拡大について耳を傾けるであろうと提言する。3節では長崎会所の機能や貿易実態について記し、オランダは日本と平和に通航する唯一の国として、「他の貿易を行う海上帝国の名において、自由貿易を開くことを江戸幕府に勧告することをその課題としなければならない」という。4節は中国との貿易、5節は朝鮮・琉球・アイヌとの交易について記しており、特に琉球については日本市場に適する物品の集散地となり得ること、戦艦・蒸気船・捕鯨船の碇泊地としても適するから、太平洋航路が開かれればますますその意義を増すだろうという。現在の貿易史研究から見ると、シーボルトの記述内容には誤解や間違いもあるが(3)、現在における江戸時代貿易史研究の雛形を提供しているようである。

6節が産業であり、彼は日本国民の3分の2は農耕・漁業・鉱業などに従事し、多数の人口を維持するための産物を提供するだけでなく、製造業者・商人に十分な仕事を与えていることを、数値をあげながら詳しく述べている。そして農産物等の生活必需品への加工、衣服製造について記すが、残念ながら未完のままで終わっている。このなかの漁業の部分に捕鯨についての記述がある(4)。

土地の耕作が一般に行きわたり、細心の注意をもって行われていることは、日本の訪れるすべての外国人の驚嘆するところである。また海岸の住民が、無限にあるさまざまな海産物をできるだけ取ることにかけての作業や技量にも驚かされる。私は自著『NIPPON』の中(「長

崎から江戸への旅」123頁)です。すでに述べたように、捕鯨についてもこの国では外国よりも収益は多く、非常に安く見積もっても毎年の純益は100万グルデンとなる。またカツオ漁やしばしば述べてきたイワシ漁は大規模に行われ、ヨーロッパのニシン漁やタラ漁と同列に置いてよいものである。

極めて簡単な内容であり、捕鯨については、すでに旅行記の部分で書いているという。シーボルトが見積もる捕鯨の純益「100万グルデン」について、彼はオランダ通貨12グルデン(ギルダー)を金1両としている(5)から、約8万3333両となる。シーボルトは、このような数値をどのようにして算出したのか、旅行記を見てみよう。

出島のオランダ商館長の江戸参府は、寛永10年(1633)から嘉永3年(1850)まで166回を数える。その目的は、江戸へ参府し、将軍に謁見、御礼を言上、献上物を呈上することによって、有利な対日貿易の継続を謝すことにあった。寛政2年(1790)からは貿易額半減にともなって4年に1度となり、シーボルトは来日3年目の文政9年(1826)に商館長スチュルレルに随行する機会を得た。彼は自らの調査・研究への協力者や門人らを一行に加えており、総勢は107人の多さであった。通常の参府人数は59人が規定で、大坂雇いの者13人くらいを入れても70人前後であった。所要日数も通常は90日ほどであったが、シーボルトの場合は事あるごとに延長作戦をとり143日におよんだ(6)。

行路について、長崎一下関は、はじめ海路であったが、船旅の不安定な危険をさけて、万治2年(1659)からその大部分を陸路にとり、長崎街道を通過して小倉に至った。小倉から下関へ関門海峡を小舟で渡海し、ここで「日吉丸」の到着を待った。「日吉丸」はオランダ商館長が瀬戸内海を船旅する際に使用する指定の和船であり、オランダ商館がチャーターした。その後、室(兵庫県たつの市)もしくは兵庫で上陸し、大坂・京都を経由して江戸に至る。

シーボルト一行の場合、文政9年1月9日(1826年2月15日)に長崎発、15日(2月21日)に小倉着、翌日に下関へ渡海する。その船上、シーボルトは鍾を垂らし、関門海峡の水深を測っている。もちろんこうした行為は禁止であり、シーボルトもそのことは十分に承知していたが、彼は監視の役

人を説得し、「悪意のない物好き」だと説明して内諾を得ていた。「水深1尋を示した。さらに海峡へ入っていくと、3、5、7から8尋となった」と記す(7)。シーボルトは海峡の名前を、オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン男爵にちなんで「ファン・デル・カペレン海峡」と名付け、図2・3の海峡図(「NIPPON」II第16図)には、水深が書き込まれている。彼は船上から1尋、2尋と数えながら鍾をつけた紐を垂らしたのである。尋は、大人が両手を一杯に広げた長さの単位であり、明治時代に1尋=6尺と定められ、1尋は約1.181メートルになったが、人によってその長さは異なり、1尋を5尺(約1.515メートル)とすることもある。シーボルトの場合、同じ下関の滞在記事のなかに「20尋(30.3メートル)のセメクジラ」とあるから(8)、1尋=1.515メートルで計算している。

〔図2〕 『NIPPON』II第16図 ファン・デル・カペレン海峡の地図



九州大学附属図書館医学分館蔵

〔図3〕 拡大図



シーボルトは、1月16日から同24日(西暦2月2日~3月2日)までの9日間、関門海峡の各地を緯度・経度を含めて測量

するとともに、多数の門人たちと面会し、また門人が連れてきた患者を診察した。集まった門人の中に前年に入門した高野長英^{ちやうえい}がおり、彼は「鯨ならびに捕鯨について」と題するオランダ語論文を提出した。論文の課題はシーボルトが与えたものであり、論文提出と引き替えに「ドクトルの免許」が与えられた（シーボルトに正式な博士号を与える権限はなく、「卓越した知識を修得した」ことの証明書の類である）。高野は仙台藩水沢留守家の家臣後藤実慶の三男として生まれ、蘭方医高野玄斎の養子となった。彼は文政3年に江戸に赴き、同8年に長崎へ行く。高野は22歳、シーボルトは29歳であった。入塾後に高野が父玄斎へ宛てた書状には、「長崎鳴滝と申処に和蘭シーボルト塾に寄宿仕候、万事都合宜敷勤学仕候」（文政8年10月27日付）とある（9）。オランダ語能力の高かった高野に、シーボルトは翻訳を依頼しており、同じく父へ宛てた書状に「シーボルト方より是又和文蘭文に書替候故、少々宛雑費之助力に預り」（文政10年1月15日付）とある（10）。高野がシーボルトのもとで翻訳のアルバイトをし、滞在費を稼いでいることがわかる。

高野をはじめシーボルト門人が提出したオランダ語論文は、昭和10年にベルリンの日本学会から日本側へ貸し出され、当時の東京科学博物館で「シーボルト資料展覧会」（4月20日～29日）が催された。伊藤圭介^{けいすけ}や岡研介^{けんかい}

〔図4〕 高野長英訳『南島誌』



ボフム大学図書館蔵

らの論文など42点の存在が確認されたが、そのなかに高野論文「鯨ならびに捕鯨について」は含まれていない（11）。すでにこの時点でなくなっていたようである。彼は翻訳のアルバイトをしていたから、他の高野論文は数多く、「日本と中国の医薬に関する略記」「日本婦人の礼儀作法・婦人の化粧・結婚風習について」などがドイツのボフム大学図書館にシーボルト・コレクションとして現存している。図4は『南島誌』を訳した高野のオランダ語文であり（No.1.311）、表紙のタイトルはシーボルトの直筆になる。ボフム大学を調査したが、高野の捕鯨についての論文はやはり見当たらなかった（2006年12月、2007年9月、2008年9月の調査）。

捕鯨に関する高野の情報源は平戸の捕鯨業者であった。このことは、シーボルトが旅行記のなかに明記している。1月21日の記事に「そこにはたくさんの患者が待っていた。そのなかに平戸の捕鯨の仕事をしている者がいたが、高野長英の前述の捕鯨に関する論文は、この人に負うところがすこぶる多い」とある（12）。高野は捕鯨業者を連れてきてシーボルトに面会させたのである。この捕鯨業者は、平戸藩の生月島^{いきつき}を本拠とする益富組^{ますとみ}の5代目当主一益富又左衛門正弘（安永5～天保3年）であったと考えられる（「益富家略系図」、益富哲朗氏のご教授による）。益富家は享保10年（1725）から「突取法」による捕鯨を始め、同18年には網を使い始め（「網掛突取法」）、シーボルト来日頃はずっとも繁栄していた捕鯨業者であった。寛保1年（1741）～弘化3年（1846）の最盛期（106年間）、益富組では「鯨凡二万二千二百本」を捕獲しているから（13）、年平均で約200頭となる。

シーボルトは日本の捕鯨について、ヨーロッパと比較しながら、ヨーロッパの捕鯨船は捕獲・鯨油の製造のために必要な装備をすべて備えて各船ごとに出漁するのに対し、日本では集団で捕獲するという。

日本では、普通25の小舟と8艘の割合に大きい船が船団を作って、鯨をとりにゆく。小さい方の船は鯨船といい、5～6間（9～10メートル）の長さの覆いない舟で、8つの櫓をもち、11ないし13人が乗り組んでいるのは、本来捕鯨をするためのものである。彼らは鯨を見つけると、この小さい舟に乗って鯨に向かって漕ぎ進み、モリを投げる。大きい方の船は、われわれが47頁で堺船とい

う名で述べたもので、商船式に造られていて(普通イサワ船とも呼ばれている)木造船を用いる。傷ついた鯨をつつんだり、あるいはその退路を断つ大きい鯨網を運搬したりする役目を受けもつ。こういう網は稲藁か、またまれにシュロの繊維で編んだもので、10丈(38.18メートル)の深さで、300メートルの長さがあるので、これだけで船の積荷となる。捕って殺された鯨をその網でつつみ、普通は漁村まで引っぱってゆき、栈橋のうちとくにそういう設備のある場所で切り開く。そして肉や脂身やその他食用になるところは魚屋が買い集め、新しいうちに日本中のすべての港へ送り出す。(2巻, 340ページ)

シーボルトは実際に捕鯨を見聞したわけでないが、高野論文や捕鯨業者からの聞き取りによって、網を張って鯨を追い込み、鉞で仕留める当時の「網掛突取法」による捕鯨を簡潔にまとめている。彼はこの他にも、需要が多いのはセキジラとコクジラの肉であること、生よりも塩鯨肉の方が美味しいこと、鯨油を菜種油よりも好んで使用すること、油をとった残りカスも貧乏人の食用となり、粉は肥料として用いられていることなど、「ヨーロッパでは人々がまだ考えも及ばなかった他の用途」があることを紹介している。

ただし、『NIPPON』の翻訳版である『シーボルト「日本」』(雄松堂)2巻の捕鯨についての部分には、誤訳やミスがある。翻訳版339ページでは、捕鯨の利益について、

1頭の大きなセキジラは3600両から4000両—7000から8000グルデン—までもする。そして平均して年間に250から300頭までのクジラを捕らえるので、それから考えても日本における捕鯨という部門の重要さがわかる。ごく控え目に見積っても、クジラは100グルデンと評価されるかもしれない。

とある。シーボルトは捕鯨の利益を「100グルデン」と見積もっているとあるが、この数値は前述した『NIPPON』6章6節の記述「毎年の純益は100万グルデン」と大幅に違う。九大本『NIPPON』の原本をみると、そこには「auf eine Million Gulden schätzen」とあり、100万グルデンと明記されている。誤植なのだろうか。また、セキジラ1頭の価格が3600—4000両とあることについて、仙台藩学養賢堂の学頭であった大槻清準編『^{おおつき}鯨史稿』(14)(文化5年)4巻と比較してみよう。大槻は平戸藩生月の益富組をはじめ他の捕鯨地を実地に訪れ、内外の捕鯨に関する諸書を引用して編纂している。彼は「平戸ノ老楽」から聞いたこととして、大きなセキジラ1頭で「六十貫目」、小さくても「拾貫目」となるという。仮に金1両=銀60目で換算すると、大セキジラは金1000両、小は166両となる。この数値は翻訳版と大きく異なる。そこで原本をみると、「mit 3600 bis 4000 Tail」とあり、「両」でなく「Tail」が単位となっている。

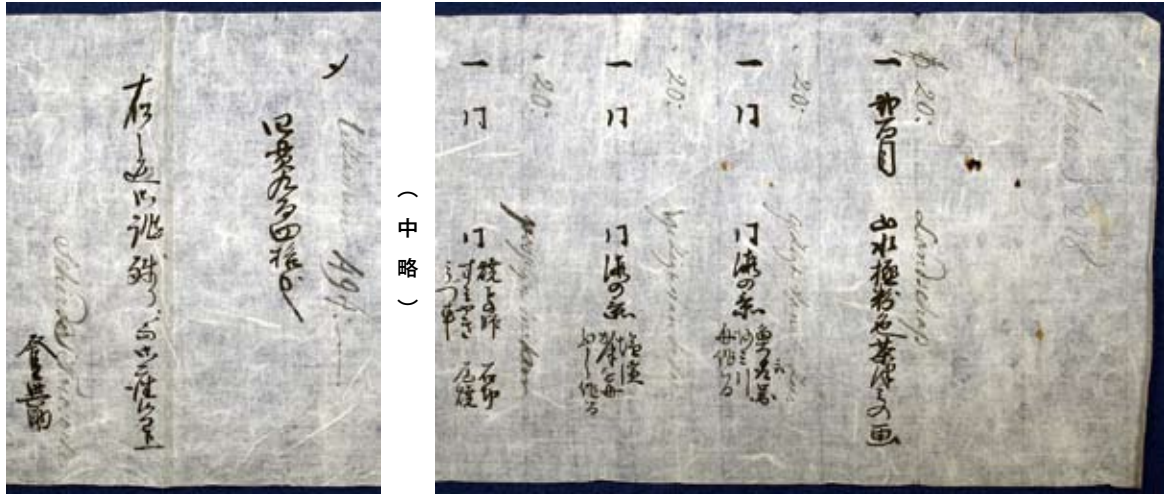
「Tail」(テール)とは、東インド会社(政府)の日本国内における取り引き用の貨幣単位であって、実際にそのような貨幣があったわけではない。1テールは2グルデン(ギルダー)に相当した。グルデンは15世紀から2002年まで使われたオランダ通貨の名前で、フローリン(florin)の古い呼び方もあり、略号として「f」または「fl」が用いられる。シーボルトは、この部分の注記として、『NIPPON』にテールと両(小判)の換算を[図5]のように記している。

要約すると、1テールはオランダ通貨の2グルデンに相当し、金1両は6テール、12グルデンに当たる、としている。つまり「3600両」でなく、「3600テール」にすべきなのであり、金に換算すると600両。4000テールは金666両となる。シーボルトが大セキジラ1頭の価値を600—666両とするのは、『鯨史稿』と比べても、納得できる数値であろう。また年間捕獲数を250—300頭としているのも、前述した益富組の年平均捕獲数と大きな開きはない。これらの数値は、

〔図5〕『NIPPON』の注記

(1) Wir wollen hier bemerken, dass, wenn wir den Tail zu f 2. niederl. Cour. berechnen, wir den Goldwerth eines Koban, der in Japan 6 Tail giebt und hier f 12 werth ist, zur Basis genommen haben. Mit dem Tail in den Büchern der alten Ostindischen Compagnie und dem gegenwärtigen Comps- und Kambang-tail verhält es sich anders: der alte Compagnietail wurde zu 33 *stivers* und der jetzige Compstail zu f 1,33 $\frac{1}{3}$ Cents und der Kambang-tail zu f 1,60 Cents berechnet.

〔図6〕 川原慶賀の請求書 (No.1.0-3.000)



ボフム大学図書館蔵

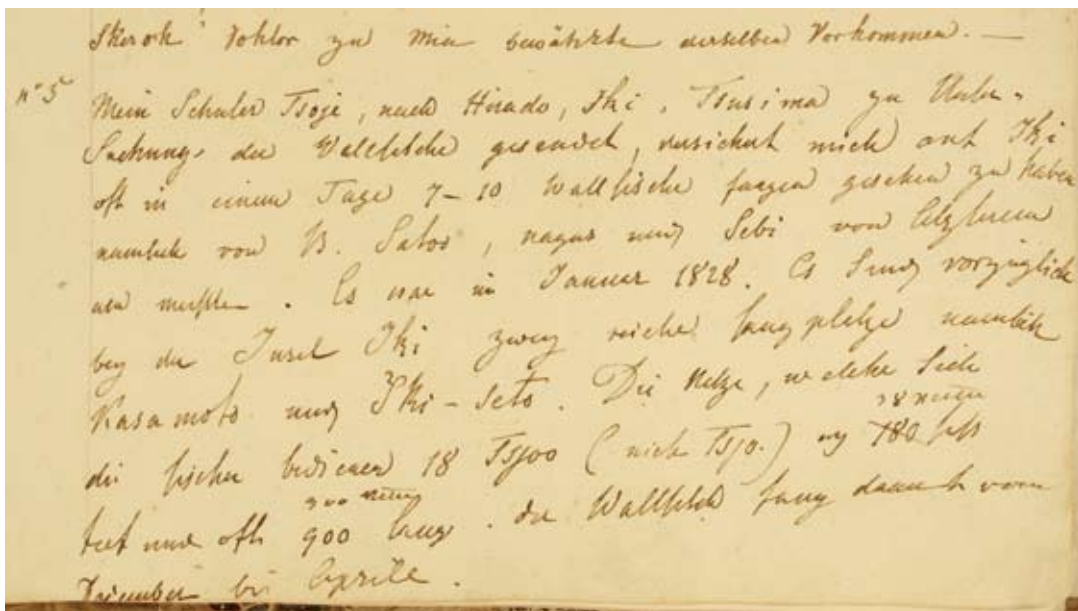
直接に捕鯨業者と面会することによって得られたと思われるが、翻訳版の作成時に「Tail」を「両」と訳した結果、シーボルトが架空の数値を上げているようになっている。他にも「Tail」を「両」にしている所があるので、注意して翻訳版を読む必要がある。

図6は川原慶賀がシーボルトに送った絵の請求書であり、「山水極粉色茶つみの画」の値段は銀200目、肩書きに20テールとある。図のようなテールの略号が用いられ、銀10目が1テールであった。銀60目=金1両の換算で、金1両=6テールとなる。

シーボルトによる捕鯨調査は下関滞在時だけでなく、この後も続いている。ドイツのボフム大学図書館に表題のない冊子(タイトルは「Zoologie」、No.1.215.000) (15)がある。これはシーボルトのメモ書きなどを1冊にまとめた雑記帳であり、このなかに『NIPPON』の捕鯨記事とほぼ同じ内容の記述がある。

日本人は鯨を鉤でとる。殺された鯨を大きい網で巻いて岸に運びあげる。彼らは団体を組んでたいてい25隻の小さい舟と8隻の大きな船で捕鯨に出かける。小さい舟は鯨舟 (Kusirafune) といい、5~6間の長さで櫓は8

〔図7〕 シーボルトの雑記帳 (No.1.215.000)



ボフム大学図書館蔵

丁あり、普通11~13人が乗り込んで鉾をもって鯨を突く役をする。大きい方の船は大きな網を運び使用する。

さらに続けて高野長英による捕鯨調査が記されている。〔図7〕には、

門人高野長英は鯨研究のため、平戸・壱岐・対馬に派遣された。壱岐においてはしばしば1日に7~10頭の鯨が得られるのを見たと言及した。種類はザトウ・ナガス・セミ。セミはもっとも多い。これは1828年1月のことである。壱岐においては勝本(Kasumoto)および壱岐瀬戸(Iki-seto)が2つの主な捕鯨地である。漁師が使う網は18丈すなわち38メートルの深さがあり、長さはしばしば300メートルである。捕鯨は12月より4月まで続く。

とあり、江戸参府の2年後、文政11年(1828)1月、高野を捕鯨調査のために平戸・壱岐・対馬に派遣したことが記されている。このことを、高野長英側の記録からも確認しておこう。文政11年2月、高野は長崎の友人から父の死去を報せる手紙を受け取った。叔父からも書状が到来し、彼は4月1日付で叔父に返書を送った。それに(16)、

二月十二日付之御書、四月六日平戸ニ而拜誦仕候、先以御家内様中御機嫌克被為入候段奉賀候、小生無変御安心可被下候、扱小生事も去冬中、平戸より書中申上候通、平戸公御頼ニ而御領分中採葉仕、夫より壱岐・対馬迄渡海、二月中旬壱州風本(勝本カ)に戻り候処、長崎朋友より書状到来、其趣国元大變之由申越候間(後略)

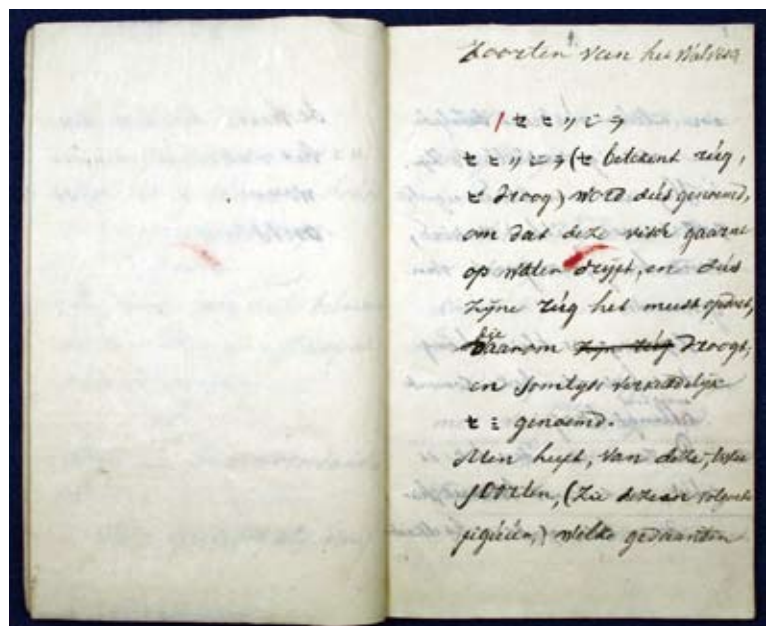
とあり、文政10年冬から11年春にかけて、高野が平戸・壱岐・対馬方面に出かけていたことは確かである。このなかに「平戸公御頼」とあり、高野は平戸藩主松浦氏とも関係がある。その由来を『高野長英伝』から要約すると、かつて山田大円という医師が江戸にいたとき、神崎屋源造に薬価代48両を未払いのまま平戸へ逃走し、松原見朴と名乗って松浦氏に仕えていた。これを突きとめた神崎屋は、長崎にいた高

〔図8〕 鯨志



ライデン大学図書館蔵

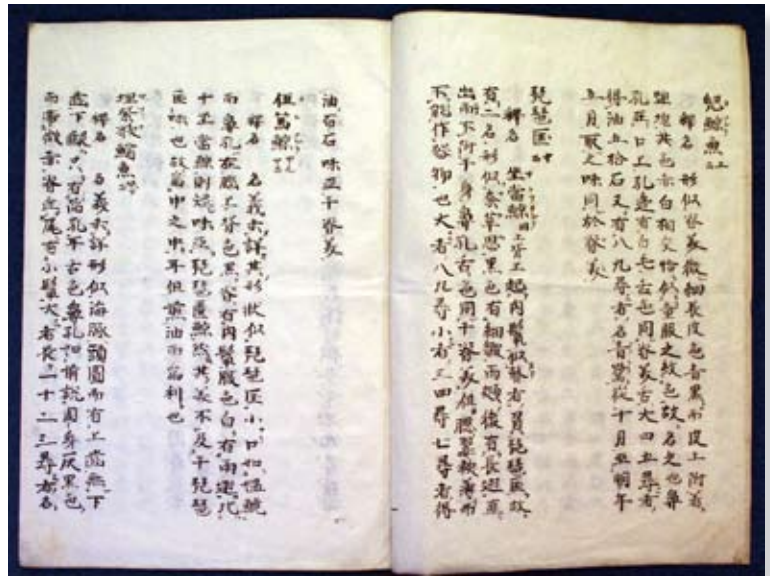
〔図9〕 岡研介「紀州産鯨について」



ボフム大学図書館蔵

野長英に宛て、平戸にいる松原見朴から貸付金を回収し、自らの学資に充てるようにという内容の書を送った。高野は神崎屋の書状をもって平戸へ行き、松原見朴と交渉した。その結果、平戸藩が所蔵する蘭書の整理・翻訳を高野に任せること、長崎の平戸藩屋敷長屋に高野を居住させることと引き替えに、貸付金を帳消しにすることとなった。その後高野は、平戸藩が所蔵する蘭書の翻訳に着手し、松浦氏の援助のもとで長崎留学を続ける。つまり、高野は文政10年冬から、松浦氏の依頼による採薬、シーボルトの依頼による捕鯨調査のため、壱岐・対馬方面に出かけていたのである。

〔図10〕 海鯨



ライデン大学図書館蔵

シーボルトの捕鯨に関する知識は、益富からの聞き取りや高野の調査の他に、他の門人からの提出論文によっている。岡研介が提出した「紀州産鯨について」は、「南紀和歌山梶取屋次右衛門」が作った宝暦10年刊『鯨志』の大部分を忠実に訳したものである。『鯨志』はもっとも古い刊行された鯨専門書であり、肉・皮・骨の利用方法、14種の鯨を図示しそれなりの動物学的説明を付した書である。さらにシーボルトは『日東魚譜』または『海鯨図』を参考にした石井宗謙の論文「鯨の記」も提出させ、参考にしている(17)。『鯨志』『海鯨』はライデン大学図書館にシーボルト・コレクションとして現存する。

シーボルトはこれらの資料をもとに日本捕鯨について記しているが、旅行記の中での記述であり、それほど詳しい内容ではない。彼は最後に「鯨そのものと捕鯨のことは、他の箇所でもっと詳しく記すつもりである」と結んでいる。しかし残念ながら実現しておらず、これ以上の記述は『NIPPON』にない。

旅行記は『NIPPON』5回配本から始まり、6・8・11回配本と続く。次の12回配本では6章の産業・貿易についての本文が配られたが、捕鯨の記述は前に見たように簡単なものにすぎなかった。

『NIPPON』本文での捕鯨に関する記事は以上の内容である。これに関係する図版として、11回配本で「捕鯨図」が配られている。

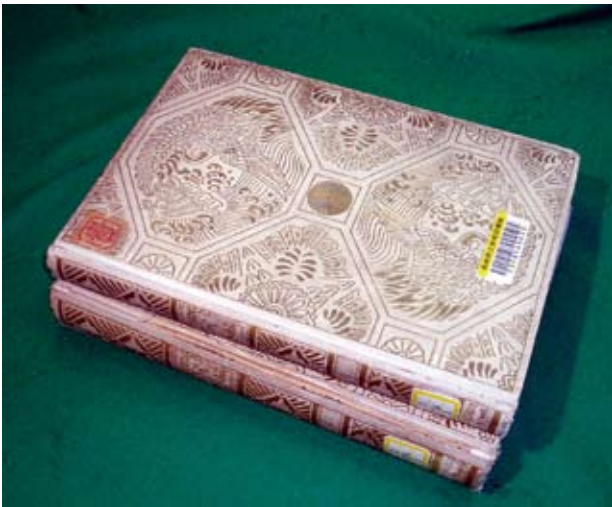
〔註〕

- (1) 宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の配本」(九州大学総合研究博物館研究報告)3号、2005年。
- (2) 『日欧貿易史概観』(1833刊)。庄司三男訳「メイラン日本」(雄松堂、2002年)に原文で掲載。
- (3) 永積洋子「日本の貿易」(『シーボルト「日本」の研究と解説』、講談社、1977年)、鈴木康子「シーボルトの貿易論とその評価」(『季刊日本思想史』55号、1999年)。
- (4) 『シーボルト「日本」』4巻、298頁(雄松堂、1978年)。
- (5) 『シーボルト「日本」』2巻、350頁にシーボルトの注記がある。「われわれがテールをオランダの通貨2グルデンに換算する場合、日本では6テールに当たり、そしてここで12グルデンの値打ちがある小判1枚の金貨価値を、われわれは基礎としたことを述べておきたい」と訳されている。なお、テールはオランダ商館員とオランダ通詞の間で案出した新造の表記であり(片桐一男小「江戸のオランダ人」、中公新書、2000年)、1テールは銀10匁、オランダ通貨の2ギルダー(グルデン)に相当した。
- (6) 片桐一男小「江戸のオランダ人」(中公新書、2000年)。
- (7) 『シーボルト「日本」』2巻、316頁。
- (8) 『シーボルト「日本」』2巻、339頁。
- (9) 高野長運『高野長英伝』173頁(岩波書店、1943年)。
- (10) 高野長運『高野長英伝』191頁。
- (11) 昭和10年、当時の東京科学博物館において、ベルリンの日本学会が所蔵するシーボルト関係史料(306点)を主体に、国内にある関係史料とともに「シーボルト資料展覧会」(4月20日~29日)が開催され、門人が提出したオランダ語論文も展示された(昭和10年「シーボルト資料展覧会出品目録」、日独文化協会他主催)。この時、日本側では一部の複製を作成し、解説を付けて刊行した(シーボルト文献研究室編「施福多先生文献影影」、荒井書店、1936年)。現在、ドイツに返却された門人提出の論文などはボフム大学図書館にあるが、第2次大戦で被災したものも少なくない。
- (12) 『シーボルト「日本」』2巻、338頁。
- (13) 秀村選三「近世西海捕鯨業における生月益富組の創業」(『久留米大学比較文化研究所紀要』19号、1997年)、松下志朗「西海捕鯨における連上銀について」(『創立三五周年記念論文集人文編』、福岡大学、1969年)。
- (14) 「祭魚洞文庫」、国文学研究資料館蔵。
- (15) ボフム大学図書館シーボルト・コレクション(タイトルは「Zoologie」=動物学に関する手記)。小川鼎三「鯨の話」(中央公論社、1973年)の翻訳を参考にした。ただし、小川氏も「テール」を「両」と訳している。
- (16) 高野長運『高野長英伝』196頁。
- (17) 小川鼎三「鯨の話」。

3.『NIPPON』の捕鯨図

11回配本の本文は、参府旅行記の最終部分である下関滞在と下関から室までの船旅が配られた。現在、我々は『江戸参府紀行』（斎藤信訢、東洋文庫87、1797年）によって、容易にシーボルトの江戸滞在中の記録や帰路の記事を読むことができるが、それらは初版『NIPPON』には含

〔図11〕 『NIPPON』第2版

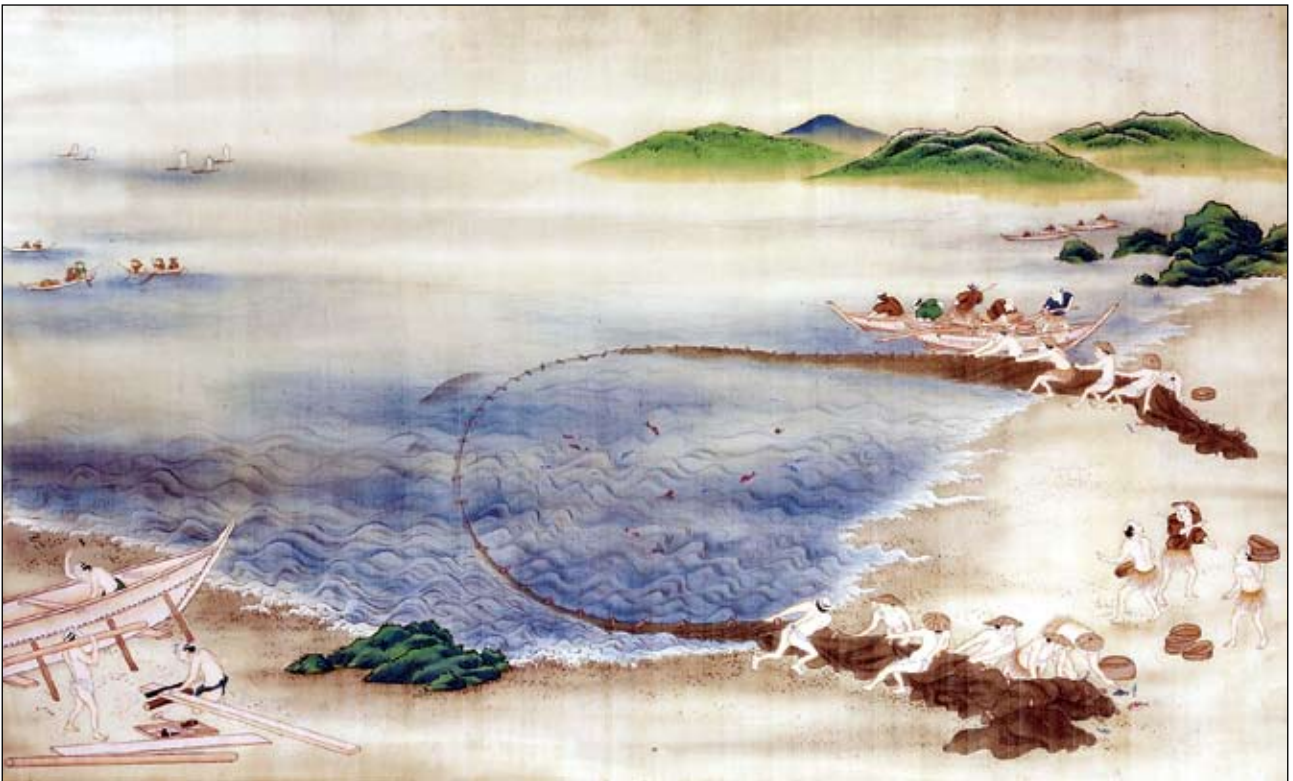


長崎歴史文化博物館蔵／「呉秀三寄贈」の印あり

まれていなかった。初版で出たのは瀬戸内の室までの旅行記であり、その後の部分が出たのは明治30年(1897)に刊行された第2版においてであった。2版は、シーボルトの死去後、息子であるアレキサンダーとハイリッヒが中心となり、日本からも旧大名の華族などが後援してシーボルトの生誕100年を記念して出版された。2版では、初版の内容が削除されたり、追加された部分が多く、内容的にも形態的にも初版と大きく異なる。江戸参府の記事は、2人の息子が残っていたシーボルトの原稿などをもとに修正・加筆したものである。

11回配本に添えられた図版は、下関から江戸までの街道筋風景を描いた図版16枚と、『NIPPON』6章の産業に関する狩猟図2枚、漁業・捕鯨図2枚の計20枚であった。狩猟図の2枚には「NIPPON VI」「TAB I」とあって、『NIPPON』6章の1番図版とある。そして地引き網を描いた図版に「NIPPON VI」「TAB II」、次の捕鯨図に「NIPPON VI」「TAB III」とあり、6章2・3番の図版となっ

〔図12〕 地引網漁



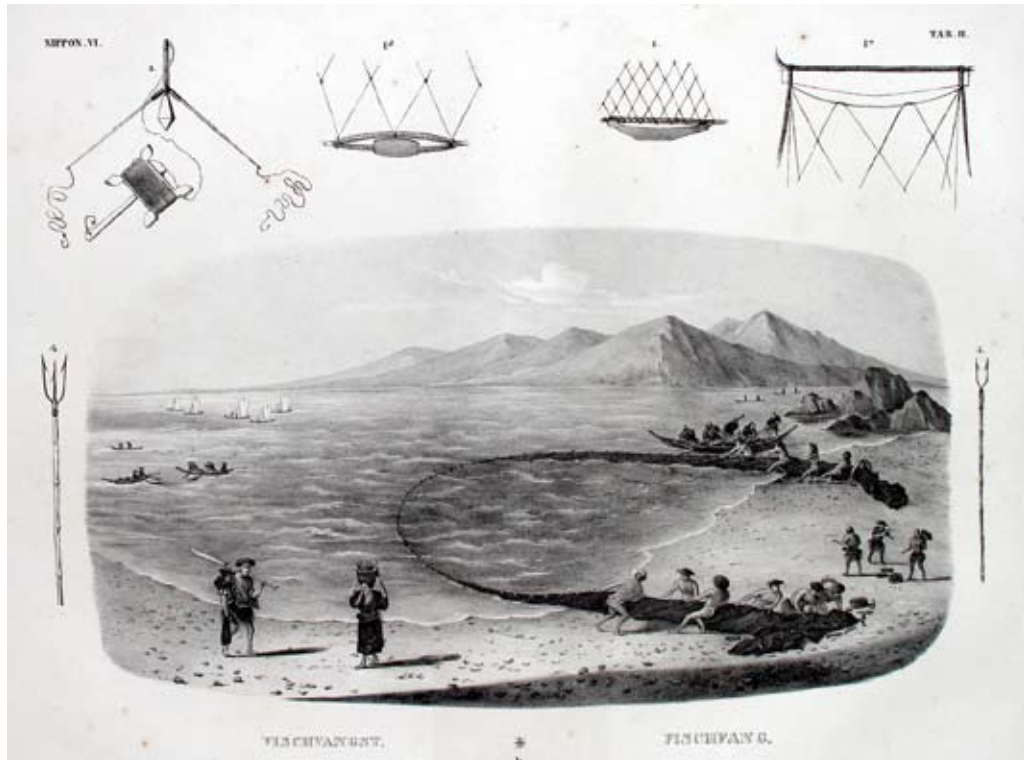
ライデン国立民族学博物館蔵

ている。

まず2番の地引き網図からみる。この原画は川原慶賀(田口種美・登与助とも)によって描かれており、実物はオランダ、ライデン国立民族学博物館にある。さらにこの絵については慶賀の請求書も残る。前掲したように、請求書

はドイツのボフム大学にあり、27点の絵それぞれに値段を記し(合計4貫940目)、最後に「右之通御^{あつらえ}残りニ而御座候、以上」と「登與助」の署名があり、宛名・日付はない(1)。このなかで地引き網図の原画は「同海の景 魚取図・あみ引・舟作る」と題され、銀200目が請求されている。

〔図13〕『NIPPON』VI 第2図 漁獲



九州大学付属図書館蔵

〔図14〕『人物画帳』



ミュンヘン国立民族学博物館蔵

〔図15〕『人物画帳』



ミュンヘン国立民族学博物館蔵

原画は絹本彩色であり、畳屋や提灯屋などの職人を描いた紙本彩色(1枚銀40目)に比べると高価であった。原画と『NIPPON』図版を並べると、シーボルトが慶賀の絵をそのまま使用せずに、アレンジを加えていることがわかる。造船の部分を省略して、代わりに漁夫と婦人の魚売り図を加え、上部には網や釣り糸、「しかけ」や錨を追加している。追加された漁具の一部は、現在(2008年9月)、ライデンにあるシーボルト・ハウス(2)に展示されており、シーボルトが実物を収集し、図版に挿入していることがわかる。一方、漁夫と婦人の図は、ドイツのミュンヘン国立民族学博物館にあるシーボルト・コレクションの『人物画帳』のなかにあり、それからの転載である(3)。シーボルトは109態の各種職業者一川越え人足、海女、獅子舞、勧進僧などを和紙に描かせ、これを台紙に貼り付けてアルバムに仕立てて持っていた。

地引き網図に続く図版が捕鯨図である。中央のやや左寄りに追いつめられた鯨がおり、船上から錨がいくつも投げられている。錨は上向きの角度で投げあげられ、その重さで鯨に突き刺さる。図版はこのことを的確に表現している。錨の射程距離は、軽い錨で13メートル、重い万錨で8~9メートルほどといわれるが(4)、捕鯨図はもう少し距離があるように描かれている。

錨を打つのが「羽指」であり、とくに一番錨は大変な榮譽とされ、高い報償が与えられた。羽指が乗り込み鯨を追い立てるのが「勢子船」であり、快速を必要としたから、8丁の櫓があった。天保3年(1832)、益富組と平戸藩の共同で刊行された『勇魚取絵詞』(5)は益富組の捕鯨を図説した書である。これによると、勢子船(20艘)は長さ7尋、櫓8丁、羽指の他に13人が乗り込んだ。他に捕獲した鯨を運ぶための「持双船」(4艘)があり、大きさは勢子船と同

〔図16〕『NIPPON』VI 第3図 捕鯨



九州大学付属図書館医学分館蔵

〔図17〕 『張公捕魚』納屋場



ライデン国立民族学博物館蔵

じで8丁櫓、12~13人が乗った。そして鯨の予想進路上に網を張るのが「双海船」(6艘)である。これは勢子船よりも一回り大きく、とくに幅が5割増しで荷船のようにがっしりしていた。2艘が1組になって網を張り、6艘あるから3組に分かれて三重に網をずらしながら張る。

シーボルトは、25艘の小さな船と8艘の大きな船が一同となって捕鯨すると述べており、『勇魚取絵詞』と比べて、網船の双海船の数が少し違うが、それほど大きな違いはない。捕鯨図には、鯨の回りに25艘ほどの船が描かれている。図の左端には張られた網が描かれており、一回り大きな双海船もいたことになるが、船の形は描き分けられていない。

〔図18〕 『張公捕魚』第3場面



ライデン国立民族学博物館蔵

〔図19〕『張公捕魚』第5場面



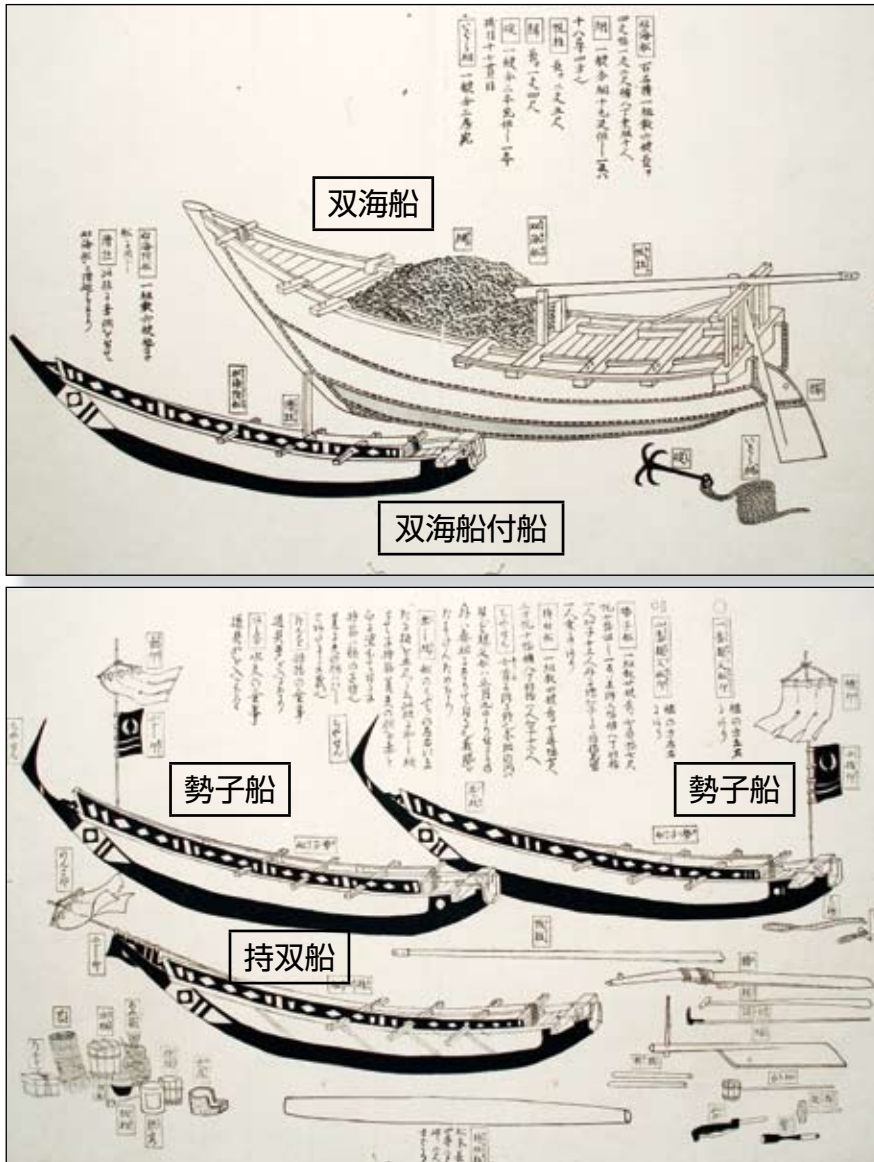
ライデン国立民族学博物館蔵

オランダのライデン国立民族学博物館のシーボルト・コレクションに『張公捕魚』と題する捕鯨図（現在は折本仕立て）があり、絵の最後は、益富家の家紋が染め抜かれた幟の立つ納屋場（解体・加工場）の景色となっている。これは、下関での面会時に益富正弘が持参し、これをもとに捕鯨業について解説したものか、または高野長英を介してシーボルトが入手したものと考えられるが、裏付け史料はない。この絵巻の第3場面は、勢子船が鯨を追い立て、6艘の双海船が2艘1組になって網を張り出そうとする様子となっており、勢子船と網を積んだ双海船は描き分けられている。さらに第5場面では張られた網の様子が描かれている。この絵巻をシーボルトは所持していたのであり、勢子船と双海船の違いは容易に理解できたと思われるが、『NIPPON』捕鯨図は船を区別していな

い。しかも勢子船と双海船を混合して描いているようである。『NIPPON』捕鯨図では勢子船の艦ともに荷台のようなものがあるが、それらは勢子船になく、網を運ぶ双海船に特徴的な構造である。『勇魚取絵詞』によると、双海船の艦に柱を支える台のようなものが設置されている。『NIPPON』捕鯨図の船にはすべてに荷台のようなものが描かれており、勢子船と双海船の構造を混ぜ合わせた形となっている。

また、シーボルトは網の長さを300メートルとしているが、『勇魚取絵詞』では網1反は「十八尋四方なり」、「十九反継合たるを双海船一艘に積」とある。1尋=1.515メートルとすると、1反は27メートル四方、双海船1艘には長さ19反=513メートルの網を積んでいたことになる。網の長さなどにシーボルトの誤解はあるが、『NIPPON』捕鯨図は、

〔図20〕『勇魚取絵詞』



長崎県壱岐郷土館蔵

で行われた。松の前には、鯨の行き先を旗で知らせる人々が描かれており、これは『張公捕魚』にもある。右下段にいる2人の人物は『人物画帳』からの転用であり、1人は羽指、1人は網元である。シーボルトがここに挿入させたのである。

捕鯨図には「日本の絵にならってファン・ストラテンが石版に描き、ファン・デル・ハントが印刷した」と記されているから、何らかの日本製原図があったことになる。西海地域だけでなく、紀州地域の捕鯨絵巻を30点ほど確認したが（確認した捕鯨絵巻の多くは「九大デジタル・アーカイブ」で公開している。<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kujira/>）、原図と思われるものはなかった。シーボルト所持の『張公捕魚』にも原図と思われる場面はない。

日本でどのように鯨を捕っているのかを1枚の絵で的確に表している。これを見れば、鯨の捕獲・鯨油作製のための装備を備えて数年間かけて出漁するヨーロッパやアメリカ捕鯨との違いをすぐに理解できたであろう。

『NIPPON』捕鯨図の陸側を見ると、松には雪が積っており、冬の時期を表している。『勇魚取絵詞』にも「小寒の節の前後十日許の間」に操業を開始するとある。「二四節気」の一つである「小寒」は、現在の1月5日頃にあたる。捕鯨は冬場の作業であり、南下する鯨を狙う冬組は2月頃まで、その後北上する鯨を狙う春組が4月頃ま

〔註〕

- (1) ボフム大学図書館蔵(No.1.0-3)。慶賀の請求書は、沼田次郎「川原慶賀の画料」(『日本歴史』344号、1977年)に紹介されている。細かいことながら、沼田氏は「右之通御眺残り…」とされているが、「眺」ではなく「詔」と読むべきである。
- (2) 1832年、シーボルトはライデンのラーベンプルフ19番地の家を借り、自宅兼「日本博物館」としてコレクションを公開していた。その建物が改修され、現在は博物館として一般公開されている。
- (3) 小林淳一「川原慶賀筆『人物画帳』」(ヨーゼフクライナー編『黄昏のトクガワジャン』、NHKブックス、1988年)。
- (4) 中園成生「くじら取りの系譜」91頁(長崎新聞社、2001年)。
- (5) 長崎県壱岐郷土館蔵。
- (6) 小林淳一「川原慶賀筆『人物画帳』」。

おわりに

シーボルトの子孫が居住するドイツ(シュルヒテルン市郊外エルム村)のブランデンシュタイン城博物館には、彼の個人的な手紙や遺品などが所蔵されている。そのなかに『NIPPON』図版の下絵あるいはデッサンと思われる水彩画の捕鯨図がある。左上に「NIPPON III」、右上に「Tab III」とあって、図版番号は一致する。ただし、「朝日」や羽指などは描かれていない(〔図23])。

同じ水彩画で、木曾の御嶽山を描いた図もブランデンシュタイン城博物館にある(〔図21])。これは谷文晁『名山図譜』を原画とする(1)。シーボルトは江戸参府において、東海道を往復しており、中山道を通っていないが、『NIPPON』には彼が見た富士山も含めて20カ所の山々が谷文晁『名山図譜』をもとに紹介されている(2)。図版を見くらべてみると、[1]シーボルトが持ち帰った『名山図譜』では荷を背負った馬と馬子が画面の左下に描かれていたが、[2]のデッサンでは省かれ、[3]『NIPPON』図版では修行僧のような人物に変更されている。その人物は『人物画帳』のなかにあり、全国を廻り書写した法華経を納経して歩いた修行僧の「六部」である。シーボルトは『人物画帳』を多用している。

御嶽山の図は、『NIPPON』
 図版がどのように作成されたのかを端的に示している。捕鯨図も同じような行程で作成されたと考えられるが、原図は不明である。さらに、シーボルトがどのような意図で「朝日」を挿入したのか、近代日本海軍の「旭日旗」のような図案をどのようにして考案したのだろうか。



ミュンヘン国立民族学博物館蔵

『NIPPON』掲載の捕鯨図はすぐにアメリカの新聞にも利用され、1855年12月1日付東海岸のボストンで発行された「BALLOU'S PICTORIAL DRAWING-ROOM COMPANION」に左右反転画像で紹介される(〔図27])。網と鉞で鯨を捕獲する日本の沿岸捕鯨について解説し、船はよりシャープで軽いという。『NIPPON』の発行部数はせいぜい200部、しかもかなり高価な本であったか

ら、多くの人々の目に触れることはなかったが、新聞は違う。

〔図21〕 御嶽山



〔1〕 『名山図譜』(ライデン大学図書館蔵)



〔2〕 『御嶽山図』(ブランデンシュタイン城博物館蔵)



〔3〕 『NIPPON』I第6図 御嶽
 (九州大学付属図書館医学分館蔵)

〔註〕

- (1)ライデン大学図書館には、シーボルトが収集した谷文晁『名山図譜』が所蔵されている。文化1年『名山図譜』は好評を博し、文化9年には『日本名山図会』と改題されて刊行された。シーボルトは第2版というべき文化9年版ではなく、初版を持ち帰っている。
- (2)宮崎克則「シーボルト『NIPPON』と谷文晁『名山図譜』」(九州大学総合研究博物館研究報告)4号、2006年。

〔図23〕 捕鯨



ブランデンシュタイン城博物館蔵

〔図24〕 『NIPPON』VI第3図 捕鯨



〔図25〕 『人物画帳』の網元



ミュンヘン国立民族学博物館蔵

〔図26〕 『人物画帳』の羽指



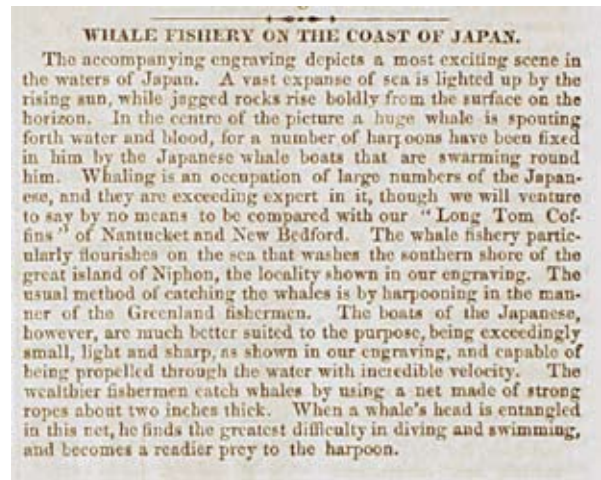
ミュンヘン国立民族学博物館蔵

九州大学附属図書館医学分館蔵

〔図27〕 1855年「BALLOU'S PICTORIAL DRAWING-ROOM COMPANION」



〔拡大図1〕



〔拡大図2〕



(ドイツ、ケルン市)バーセルメス (Barthelmess) 氏蔵

『パウロ絵入り新聞』(1855年12月1日付)の「日本の沿岸捕鯨」。ペリーの日本遠征前後から、アメリカの絵入り新聞には、シーボルト『NIPPON』をニュースソースとした例が散見される。